

ドストエフスキイ研究会便り（2）

研究会30年の活動

今回の「研究会便り」は、まず[1] - [5]において、「ドストエフスキイ研究会」の活動について大きな流れを報告し、それらと芦川が今まで発表した仕事との対応を記しておきたいと思います。

30年の活動を報告することは容易にはゆかず、どうしても舌足らずになり、また抽象的な報告になることは避けられませんが、これ以降も個別的なテーマに的を絞り、繰り返し説明をしてゆく予定です。今回はまずは、研究会30年の活動の「概観」としてお読み下さい。

この「研究会便り」が第一の目標とすることは、新たにドストエフスキイ世界に惹きつけられ、また聖書世界にも関心を抱かされ始めた人達が、これらの世界にどのようにアプローチしてゆけばよいのか、更には多くの先輩が、当研究会で如何なる試行錯誤を繰り返してきたのかについて、知って頂き、自らの学びの一つの参考にして頂くことです。明治以降の日本では今に至るまで、この角度からの作業は疎んじられ、怠惰さの内に放置されてきたのが現実です。

ここに記されたことはどれも皆、決して完成された学問体系などでも、ましてや宗教的マニフェストでもありません。ドストエフスキイと聖書テキストとの取り組みから、人間と世界と歴史に対する、出来るだけ深く豊かな理解を得ようとする試行錯誤の記録であり報告です。殊に当研究会は、ドストエフスキイ自身がその思索と創作の根底に置く聖書世界を、誤魔化さずに理解する努力を重ねない限り、彼の作品を真に理解することは出来ないと考え、基礎作業を続けてきました。その途中経過の報告として「研究会便り」を受け取り、参考にして頂ければ幸いです。

研究会30年の活動

－ 五つの軸に沿って －

[1]. ドストエフスキイとキリスト教

明治以来、日本社会は西洋文明の導入に当たり、「和魂洋才」の名の下に、その基盤をなすキリスト教との取り組みを怠ったまま今に至ったことは周知の事実と言えるでしょう。この問題は文学・思想・芸術を始めとする文化の領域においても同じであり、殊に聖書に深い根を置くドストエフスキイ文学理解の上では致命的な欠陥となってしまったように思われます。この流れを向こうに置き、当研究会はドストエフスキイ文学が展開する人間と世界と歴史へのアプローチを、そのキリスト教思想に焦点を絞ること、殊に聖書テキストと取り組むことから試みてきました。ここに当研究会の最大の特色もあるかと思えます。

➡その背景また土台について、これから「研究会便り」で論じてゆくこととなりますが、芦川の著作の中では、取り敢えずは以下 [5] の 3 (『ゴルゴタへの道』新教出版、2011) の第二部第一章や、「研究会便り (4)」の講演記録 (「アリョーシャとイワンの聖書 ― モスクワ時代、イエス像構成の一断面 ―」、2014)、これら二つによって全体的なことはご理解頂けると思えます。

またこの方向でのドストエフスキイとの取り組みの結果が、[5] の 2 (『罪と罰』における復活』、2007) と、4 (『カラマーゾフの兄弟論』、2016) として河合教育文化研究所から出版されています。

[2]. ドストエフスキイと聖書

－ 「テキスト」との取り組み －

ドストエフスキイ研究会が取った方法とは、まずはドストエフスキイの作品そのものを丁寧に読み込むこと、それと並行して聖書をコツコツと読むこと、これら二つのテキストとの取り組みに尽きると言えるでしょう。前者の場合、具体的にはドストエフスキイが初めて西欧社会に触れ、その報告をした『夏象冬記』(1863) (以下の [4] を参照) と、後期五大作品の第一番目の作品である『罪と罰』(1866) と、絶筆となった『カラマーゾフの兄弟』(1880) を主な対象とし、聖書テキストについては、新約ではマルコ福音書とルカ福音書やパウロ書簡、そして『ヨハネ黙示録』を、旧約では『預言書』や『詩篇』、そして『ヨブ記』等の「諸書」を中心として講読をしてきました。

芦川自身も含めて、日本人がキリスト教と聖書に対してまず示してきた反応とは、本能

的とも言えるほどのプリミティブな拒否反応であり、対象に対する落ち着いた理性的な理解の姿勢からは程遠いものと言えるでしょう。ドストエフスキイ文学への熱烈な傾倒と関心の一方、ドストエフスキイ文学が中心に置く聖書的磁場は等閑に付し、これら二つを関係のないものとして扱いつけるというのが、我々日本人の多くが、またロシア文学の専門家たちの大部分でさえもが、今も示し続ける典型的な反応です。

今までドストエフスキイ研究会に集った1000人余りの若者たちもまた、それぞれが実にナイーブかつプリミティブな形で、このような反応をし続けてきたのでした。彼らがその拒否反応をどう克服し、やがて冷静にドストエフスキイと聖書テキストに取り組むに至ったか、そして今どのような実りの時を迎えつつあるか、あるいはその努力を放棄するに至ったか——これらについては客観的に取り上げ、記録に残しておくべきであるばかりか、将来の「研究会便り」の中心テーマの一つにもしたいと思っています。

➡我々日本人がキリスト教に対して示す、本能的とも言えるほどの拒否反応の問題については、一部ですが、芦川の著作では[5]の1(『^お隅^にちた^に苦^が艾^よの^も星^ぎ — ドストエフスキイと福沢諭吉 —』)で扱っています。ここには半年にわたる大規模な「講演 + ゼミ」形式をとった、ドストエフスキイ初の西欧旅行記との取り組みの中で、浪人生がどのような反応を示したかが、そしてその結果はどのようなものであったかが、現場からの「実況中継」的に記されています。([4]を参照)

[3]. ドストエフスキイと聖書、そして「日本文化」

以上の作業と並行して、当研究会が常に注意を払い続けてきたテーマは、ドストエフスキイと聖書と日本の文化・宗教との関係についてです。例えば芭蕉や福沢諭吉・夏目漱石・太宰治・遠藤周作・小林秀雄等の日本文学・評論、また親鸞・道元・西田幾多郎・小出次雄等の宗教・思想等々、これらの多くは実に難解なものですが、敢えて若い人たちに一級の先哲たちと取り組むよう励まし、これらとドストエフスキイ文学との比較の作業を試みてきました。

➡これらの作業については、以下[5]の3(『ゴルゴタへの道—ドストエフスキイと十人の日本人—』)の特に第一部と第二部がその報告となっています。ここでは太平洋戦争の末期に書かれた西田哲学最後の「第七論文集」(『場所的論理と宗教的世界観』岩波書店、1946)の末尾が、キリスト教と浄土教との、またドストエフスキイのカラマーゾフ世界との対決であることを、これとほぼ同時期に書かれた小林秀雄や小出次雄による、ドストエフスキイと聖書との対決と対照させ

て論じています。

(前者は小林秀雄『カラマアゾフの兄弟』(1941-2)、後者は小出次雄『基督教的空間論としての ゴルゴタの論理』(1949) ですが、詳しくは上述の [5] の3『ゴルゴタへの道』を参照して下さい)

またベートーヴェンやバッハなどのクラシック音楽、ダ・ヴィンチやフェルメールやゴッホなどの西洋絵画、倪雲林や徽宗皇帝や梁楷などの中国絵画との取り組みも積極的に進めてきました。これらの作業の根は芦川の師小出次雄と、小出が伝えるその師西田幾多郎の芸術・宗教体験を土台とした思索と教育への姿勢にあり、当研究会も非力ですがその精神を受け継ぎ、伝えようとしてきました。これらの作業を積み重ねることは時間のかかる厳しいものですが、西田・小出に繋がる芸術的・宗教的感性の涵養のためにも、またドストエフスキイと聖書世界のより深い理解のためにも必要不可欠な基礎訓練であり、近代化と専門化の進んだ現代日本において失われてしまった、殊にアカデミズムの場では見る影もなくなってしまった、全人間的な教育を再構築する試みとしても不可欠なものと考えられます。この問題については、今もなお続く当研究会の柱であり、改めてこれから「研究会便り」の中心に織り込み、繰り返し紹介してゆく予定です。

[4].『夏象冬記』との取り組み

ところで当研究会の作業の中で、特に前半20年間の特色の一つとして挙げられるのは、『夏象冬記』(1863)に毎年焦点を絞り、この作品を新メンバーに、ドストエフスキイ世界への導入に不可欠なもの、彼らがこれから海外に出てゆく上での MUST として課したことでしょう。

これは1862年、ドストエフスキイが初めて旅をした西欧社会についての旅行記ですが、少々読み難いもののため、ドストエフスキイの愛読者でも紐解くことが少ない作品です。しかし主に第五章と第六章とは、世界の最先端を切って産業革命を押し進め、その成果を享受しつつある二つの大都会ロンドンとパリを訪れたドストエフスキイの、これら二都との、そして西欧近代との正面からの対決となっています。彼はそこに展開するものが、実は過酷で空虚な人間疎外・神疎外の世界でしかないこと、西欧近代文明社会とは異教神バアルとマモンが支配する世界に他ならないと断じ、ヨハネ黙示録を中心とする聖書的磁場の表現を駆使して痛烈な批判を展開したのです。後のドストエフスキイ世界が、そこから爆発的に生まれ出る原始星雲——『夏象冬記』とは、このような重要な位置を占める作品と言えるでしょう。

注目すべきは、ドストエフスキイ世界にも聖書世界にも馴染のなかった多くの若者たちが、ドストエフスキイが提示するロンドン論とパリ論から入ると、彼とほぼ同じ頃に同じ場所を訪れた福沢諭吉の西欧社会の見聞記、またロンドン論とパリ論との比較が可能とな

るという事実です。若者たちは、ここから自分自身の世界・歴史知識との比較にも興味を持つようになり、広く人間と世界と歴史について主体的な問題意識を刺激され、深くものを考える切っ掛けを与えられるのです。この書物を片手に海外に出かけ、自分自身の『夏象冬記』を記し、私に提出してくれた若者たちも出てきました。『夏象冬記』という作品は、今後の日本のドストエフスキイ研究や教育への、そして聖書的磁場に身を置いてする思索への、また日本人が島国根性から脱して真の国際人になるための、一つの大きな「手掛かり」となり「入り口」となる可能性を持つことを、私は長い間の取り組みから教えられました。

この『夏象冬記』講読の作業を、ドストエフスキイ研究会から外に出て、更に河合塾の東京地区全体の場を開き、8回にわたり展開したのが、河合文化教育研究所主宰の「エンリッチ講座」です（『夏象冬記』を読む）。この連続講座が実施されたのはもう30年近く前の1989年のことで、この年ソビエト連邦の崩壊からベルリンの壁の撤去、更には中国の天安門事件と続く世界の激動を向こうに、予備校空間で数百人に上る若者たちがドストエフスキイを熱心に読み進め、たどたどしくも熱い議論を続けたのでした。このエンリッチ連続講座の開始に当たっては、激変する世界情勢の中で、是非ドストエフスキイを生徒さんたちにぶつけて欲しい、しかも決してレベルを下げることなくと、研究所の事務局関係の方たちからの強い勧めと依頼があったことも記しておきたいと思います。丁度日本がバブルの頂点に至る頃で、世界の激動を前に未来に対する不安と、変革への熱い期待を抱く若者たちと大人たちとが共に、河合文化教育研究所のドストエフスキイ講座に集ったのでした。河合文化教育研究所の初期のピークを象徴する出来事の一つだと思います。

➡この8回の記録の中から、ドストエフスキイと全く同年に西欧世界を旅した福沢諭吉の『西航記』や『西洋事情』と重ね、比較文学・比較文化的視点から考察したものが『^お隕^{にがよもぎ}ちた^{ほし}苦^文の星—ドストエフスキイと福沢諭吉—』で、これは河合教育研究所から出版されています（次の[5]の1）。その他河合文化教育研究所発行の『河合オンパロス』第1・2号にも、連続講義を終えた直後に参加者たちが討論をした記録など、興味深い関連テーマが色々と掲載されています。

[5]. 研究会から生まれた著作・論考

その後の芦川のドストエフスキイ研究も、この『夏象冬記』を土台とし、またその延長線上に続けられ、『罪と罰』論から最新刊の『カラマゾフの兄弟』論に至ります。以下の[4]に改めてそれら四冊をまとめて記しておきます。

1. 『^お隕ちた^{にがよもぎ}苦^{ほし}文の星 — ドストエフスキイと福沢諭吉 —』(河合文化教育研究所、1997)
2. 『「罪と罰」における復活 — ドストエフスキイと聖書 —』(河合文化教育研究所、2007)
3. 『ゴルゴタへの道 — ドストエフスキイと十人の日本人 —』(新教出版社、2011)
4. 『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』(河合文化教育研究所、2016)

これらの出版後は、これらを基に改めて若者たちと芦川との間で議論が交わされ、新たな基準テキストとなり、様々な形で利用されつつあります。芦川自身も、若者たちから寄せられる感想や質問・異論などに触れることになり、これが自分自身の新たな思索への大きな刺激剤になるという善循環も生まれています。これら若者たちとの対話の記録も、これからの「研究会便り」に組み入れてゆこうと思っています。

➡これら四冊を含めた芦川の著作・論考等の詳細は2、3、4の各著作の巻末に「参考文献」として掲載してあります。

➡『カラマーゾフの兄弟論』の出版後、その「後産」にあたる論考が河合文化教育研究所のHPに「ドストエフスキイ研究会便り」として(1)～(13)まで掲載されたことは、「はじめに」に記した通りです。
(2019年1月、付記)

「研究会便り(3)」について

今回は、今までの(1)と(2)を受ける形で、当研究会の活動が具体的に理解出来るように、『カラマーゾフの兄弟』と聖書の関りについての講演記録を掲載したいと思います。